

新たに開花した温室植物 *Parkia clappertoniana* Keay

濱谷修一・柴田昌男・高井敦雄

熱帯アフリカの黄金海岸，ナイジェリアからスーダンを原産地とし，マメ科のネムノキ亜科に属する木本植物。開園直前の昭和51年に東京大学理学部附属植物園（小石川）より導入し，大温室内に地植えにして栽培を続けてきたが，1994年5月中旬に初めて開花を確認した。このとき樹高は約2 m，基部の幹回りは13.5 cmであった。

葉は2回偶数羽状複葉であった（写真1）。

花色は，全体としてえび茶色～赤色であった。小さな筒状の花が無数に集合して直径約5 cmの球状の頭状花序を形成し（写真2，3），長さ約20 cmの花柄を持ち，総状に2～10個腋生した（写真4）。

筒状の小花は長短2種類あり（図1），長い小花は花序の球状の部分，短い小花は基部に近い方の細くなった部分に集まっていた。いずれもがく，花被共に筒状で，花被は先が5裂し，10本の雄ずいといと1本の雌ずいを持っていた。長い小花は基部から雄ずいの先までの長さが20 mmで，雄ずいといと雌ずいといの先端部を花被から外に突き出していた。また，苞の様なものを1枚備えていた。葯は暗紫色，花粉は黄色，花被から外に突き出している部分の花糸および花被，がく

は白～薄黄色，花糸の花被で隠れている部分および雌ずいといは赤色であった。一方，短い小花は基部から雄ずいといの先までの長さが7 mmで，雄ずいといのうち4～5本は先端部を花被から外に出し，残りの雄ずいといと雌ずいといは縮れることによって花被の筒の中に隠れていた。苞の存在は明確でなかった。配色は，花糸全体が赤色であった点を除き，長い小花と同様であった。

本年は，写真4のような花の集合体が8本発生し，その長さは20～40 cmであった。1花序の寿命は2～3日と短く，開花時には甘い香りを発した。1本の木としての開花期間は約2週間であった。

結実は見られず，開花後すぐに脱落した。

Parkia 属は，アジア，アメリカ，アフリカ大陸の熱帯地域にまたがる広い分布を持つ属である。中でも，インドネシアからマレーシア，タイにかけて分布する *P. speciosa* は，Petai と呼ばれて種子が食用とされており，原産地では重要な植物である。一方，我国においては導入例が少ないためか，あまり知られておらず，本属について記載した文献は見かけない。開花期間が短い点は問題であるが，ユニークな花容は非常に魅力的であり，今後積極的に紹介していきたい植物である。

〈参考文献〉

Helen C. Fortune Hopkins 1993. The Indo-Pacific species of *Parkia*. *Kew Bulletin* 49 (2)

Index Kewensis 1951—1955

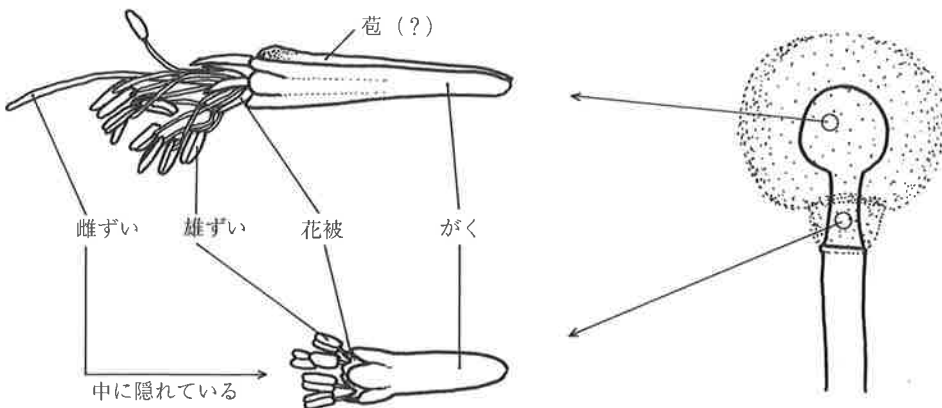


図1. 筒状の小花



写真1

葉



写真3

花序軸 (花床)



写真2

頭状花序



写真4

頭状総状花序

春に開花する草花の促成栽培 その2

濱谷修一・飯塚康博・横山裕彦

当園では毎年1月初めから約1カ月間、屋外の花が少ない時期に、一足早く春の雰囲気を楽しんでもらうという趣旨で「春をよぶ植物展」と題し、展示会を開催している。対象となる植物は正月から4月頃にかけて室内および屋外で開花する植物である。このため、展示に使用する植物の多くは、低温処理を中心とした開花調節の技術を適用することにより開花させているが、それらのうちいくつかの植物についての低温処理と開花記録はすでに本誌14号に報告した。

本報告は、その後新たに開花調節を試みた植物および、今回初めて目標とした時期に開花した植物に関する報告である。

材料および方法

〈供試材料〉 6科7属9種について調査を行った(表)。ヒガンバナ科2種、チューリップ2種については種苗会社より入手した球根を用い、それ以外については当園で養成した球根または株を用いた。

〈低温処理〉 過去の実績や資料を参考にし、5℃、10℃のいずれかの温度で4～9週間行った。10℃は育苗温室に備えつけの冷蔵庫(一方が透明なガラスのため若干光が差し込む)、5℃は当園の種子貯蔵庫(暗黒)とした。

処理方法は前報と同様に行い、表中の記述も